高橋　實著

東北一純農村の醫學的分析

岩手縣志和村に於ける社會衞生學的調査

国立保健医療科学院蔵書
10012181

朝日新聞社發行

高橋　實　著

東北一純農村の醫學的分析

—岩手縣志和村に於ける社會衞生學的考察—

朝日新聞社版

JJ
7

學士科學研究所圖書室
3542
昭和16年8月2日

凡俗に陷り易い環境に在つて　曲りなりにも　學ぶ生活をすること
のできましたのは　恩師
井上　嘉都治先生
藤田　敏彦先生
熊谷　岱藏先生
の　有形無形の御指導があつたからであり　深い感謝の意を表はす
ために　無躾ではございますが　この著を獻げさして戴きます

序

學校を卒へてこの土地の診療所で働くやうになつてから、二箇年餘りの歳月を過した。近代科學の恩惠になれてゐる身に取つて、不便な、あらゆる文化から絶縁されてゐるかの様な土地にあつて、醫療に從事することは、ある意味では非良心的でさへあると思へたのであつたが、一臺の顯微鏡と、手廻しの遠心器と、それから盛岡病院の分枝であるといふ組織への信頼と、これら僅かの條件を唯一のたのみとして、農民より學び、農村を知らうといふ欲求に從つたのである。最初の一年間は、全く教科書と首つ引であつた。できる丈け誤診をすまい、治療に手落ちのないやうに、そしてどんな場合にでも、患者諸君に親身であり度いとだけ念願して、多忙な生活を過してきたのだが、その間數々の小經驗を得ることができて、農村に於ける最大の衞生問題は何か、そして農村衞生は如何にあり、又あらねばならぬか、を考へることは、農民に對する一寄與であると同時に、自己の科學的精神が萎えることを防ぐ殆ど唯一の道であることを痛感した。そして第二年目より、診療の僅かの空時間を利用して、若干の事實を觀察し、乏しい身の廻りの文獻より學ぶことをした。それが本書の內容である。

この志和村は、盛岡市の南方四里、東北本線の日詰驛より一里、山間に入つて、周圍は一部山岳と、大部分は他の村々によつて圍まれてゐる純農村である。第一篇に於ては、志和村が純農村であり、より多く封建型を持續してゐる概況のほかに、そのもつ「過勞」條件と、都市との接觸面としての「季節的出稼」の狀態を明らかにして、社會衞生學的研究の背景を具體的に示すことを意圖した。第二篇に於ては、農村勞力及び經濟力に大きな影響を與へる結核の「感染」狀態を主として取扱ひ、第三篇に於ては、結核と並んで高い死亡率を示す乳幼兒の衞生を、二、三の角度よ

り分析した。われわれの仕事は、机の前に坐る時間が全く不足で、不定であること、及び直接の指導者、即ち、毎日叱正して呉れる人又議論し合ふ友人が共にこの土地にないこと、文獻の渉獵に甚しく不便なこと、科學的武器が缺如してゐること等によつて「科學的」であり度いといふ熾烈な意圖と反し、屢々隨筆的とならざるを得なかつた。從つていま、これを書物の形にはしたが、決して、一つの完成したものではあり得なかつた。デッサンであり、習作であり、ノートの斷片であることを承知の上に、判讀して戴き度い。

云ふまでもなく、農村衞生の內包する諸種の矛盾は、農村制度一般、しかも主として、農村生產手段の所有關係のもつ矛盾と關聯して、考察するとき始めて、生き〳〵とその眞實の樣相を露呈するのであり、所謂「東亞協同體」の mikroskopisch な形としての、「農村協同體」とでも名づくべき方向へ農村の改革が遂げられたとき、はじめて、農民の衞生狀態は、飛躍的に幸福への道を辿ることとは思ふが、農村に在る青年醫師諸君が、まさに指導者の意識を持ち、科學的精神を絕えず訓練し、Individuum の診療に對すると同樣な熱情を、農民一般の衞生狀態の在り方の探究、そして、それに對應する方策の實驗的研究に向けられたならば、熊谷教授が好んで說かれる、「上醫醫國、中醫醫人、下醫醫病、又曰、上醫醫未病之病、中醫醫欲病之病、下醫醫已病之病」の意味を、實踐に依つて學ぶことができるのではないであらうか。個々の疾患を、個々の農民を、そして農民一般を對象として、科學的に眼を注ぎ、探究の歩を進めるとき、無數の未解決の問題が、僅かづつでも、吾々青年醫師の手に依つて解かれ、大學や研究所に依つて行はれる、組織的な勞作の間隙を埋めることができるのであり、「農村醫學」の確立が、可能となるのではなからうか。

著者の最初意圖した計畫は、殘念乍ら、全く不十分にしか果されなかつたが、本年最初刊行された「朝鮮農村の社會衞生」(岩波書店版)を讀んで、同樣な意圖の下に爲された仕事が、完璧に近い程、立派に果されてゐるのを、心から悅ぶことができた。農村の提供する社會衞生學的テーマは此の書の中で、廣汎に、そして組織的に取上げられてをり、且つ、學生達の共同研究により克明に分析されてゐるから、われわれ農村に在る青年醫師に多くのものを敎へて呉れる。敢へてこの機會に推賞する。

農村に在る醫師に取つて「臨床第一、研究第二」なる生活態度が重要であることは云ふまでもない。而し乍ら、われわれが、例へ短期間であらうと、永續的にであらうと、農村に醫師として生活する場合、農村を、そして農民を眞に愛さなければ、臨床も研究も、第三、第四のものとなり、科學的精神を跡方も無く失ひ、凡俗に墮して了ふのである。いつの時代にあつても、科學的精神は光輝を持つてゐる。われ〳〵が眞の科學的精神を所有し、それを磨くために熱情を傾ける限り、亞流俗流的思想の批判より獨立することができるのである。

本書は、第一に、農村に在る青年醫師及び進取的衞生當事者諸君に、第二に、農村衞生に關心を持つあらゆる諸氏に、第三に、私の友人と、農民諸君に讀んで貰ひたい。

分析が甚しく未熟であり、統計學的な取扱ひ方が杜撰であり、記述が不鮮明である等の凡ての缺陷にも拘らず斯くの如き試みが、數多く世に行はれることを期待して、敢へて第一線の戰死者となる、その善良さに免じて、笑覽して戴き度い。

擱筆するに當り、熊谷內科敎室員諸氏の志和村「結核集團檢診」に對して、敬意と、深い感謝を述べ、併せて結核に關する項目は凡て著者自身の見解による記述であることを特記し、熊谷內科敎室の科學的名譽に障害となるやうなことのないやうに明らかにしておく。

また、この仕事を悅んで許可して呉れた盛岡病院長敷波義雄博士、出版を引受けて呉れた岩手縣醫藥聯合會應木嘉

右衛門氏、多忙な著者に絶大なる協力を惜しまなかつた志和村長北條留美氏、上平澤小學校長鋼勒地喜章氏、及び多數の村吏員訓導諸氏に感謝し、志和診療所の八重樫忠子、佐藤榮、藤原はるえ、齋藤友助、高橋早苗、田口照子、藤原キクの諸君と仕事完了の悦びを頒つ。

紀元二千六百年七月七日、
事變第四年目に入り、日本の運命がより强固にならうとする記念日に當り脱稿す。

志和の柚居にて
著者

再刊の言葉

昨年九月、岩手縣醫藥聯合會より、この書物を出版したとき、私は親愛なる農民に、さゝやか乍ら一つの贈物をした氣持で非常に嬉しかつた。ところが意外にも私の喜びはそれだけには止まらず、尊敬できる多くの方々より、眞に好意ある批判を受けることができて、限りない感激の想ひに浸ることができた。「結核」（弘文堂版）の著者、松田道雄氏は、帝國大學新聞第八百二十六號に於て、醫學への熱情があり、屬する診療組織が公の利益を先行せしめ得るものであるならば、青年の醫師もよい仕事をなし得るといふことに注目すべきだ、と記述して、青年醫師に對する元氣づけのために、私の書物を役立てゝくれ、また水野清司氏は「社會事業」第二十四卷第十二號に於て、懇切な批判をしてくれた。氏の批判の主要な點は「經濟分析と醫學的所見との結び付きも、專ら出稼の問題に於て關係づけられたに止まり、農村の住居、榮養、生活樣式の調査等には殆ど手を付けられてゐない」といふので、このことは私が最初より意識してゐると否とに拘らず、重要な指摘であると思ふ。昨年秋この書物を完成して以來、志和村に於ては、結核と乳幼兒衛生についてのより深刻な、實踐と平行した分析が續けられてをり、その一環として、住居、衣服、食物の調査を繼續し、農村より學ぶことの限りなく多いことに驚嘆してゐる。それらについては、適當な機會に發表して、批判及び教示を受けたいと考へてゐる。しかし乍ら私のこゝで主張したいことは、水野氏も指摘してゐる如く、「志和村の結核は遠からず絶滅するであらうなどと期待してはならない。志和村は離れ小島ではないのである。」（前掲書第八八頁）といふ問題を充分に科學的に理解すること、卽ち古來多くの學者達によつて論議されてきた「都市と農村との關係」を、社會醫學の面より徹底的に、實證的に、崇高な目的意識に從つて解明することにこそ、われわれ

農村に在る青年醫師の課題があるのである。問題の把握を根本的な仕方でなすことによつて、われわれは、住宅主義者、榮養至上主義者等々になる危險を避けなければならない。農村の住居、榮養、生活樣式が、農民の健康に對して著しく大きい影響をもつことを分析する活動の重要さに眩惑されて、農民の現在の生活樣式を規定してゐるもの――それについてこの書物は概念的であるといふ缺陷を持ち乍らも、若干問題の所在を明らかにすることを努めたのであるが――は何かといふことを重大な社會醫學的テーマとすることを怠つてはならない。然らざるときは、結核を無くすためには、農村の住居に窓さへ明ければよい、とか、肝油さへ飲ませればよい、とかの如き錯覺に陷る危險が發生するのではないかと考へる。日本を眞に愛し、その幸福を希ふものは、厚生問題の根幹を衝くやうな醫學的活動がなされなければならないし、そのやうな意圖との聯關を絶えず念頭に置いてはじめて、優れた醫學的業績が成就するのではなからうか。

再刊されるに際し、さゝやかな愚見を述べた。そしてこの小さな書物が社會醫學の發達のための、延いては日本人の幸福のための一つの小さな捨石となることができたならば、著者の喜びこれに越すものはない。

辛巳正月

著者

目次

序

第一篇　一視角より觀察せる志和村の經濟的概況……一

第一章　緒言……一

第二章　志和村に於ける小經營存續の現狀……二

第三章　志和村に於ける農業經營及び農家經濟……七

第四章　結び……二八

第二篇　農村結核に關する考察……二九

第一章　緒言―史的展望……二九

第二章　農村に於ける結核感染……三九

第一節　學童の結核感染狀態……四〇

一　序言……四〇

二　ツベルクリン皮內反應檢査の意義……四一

三　ツベルクリン皮內反應施行の方法に關して……四三

四　志和村學童ッ反應平均陽性率及びその年齢別觀察……四五
五　性別に觀たるッ反應陽性率……四八
六　部落別ッ反應成績……五〇
七　生活程度別ッ反應成績……五三
八　志和村の二つの學區――上平澤小學校及び片寄小學校――に就てその陽性率を比較し併せて感染源の問題を檢討す……五五
(1)　二つの小學校に於けるッ反應陽性率の比較……五五
(2)　片寄小學校兒童ッ反應陽性者に就て調査せる赤血球沈降速度……五六
(3)　片寄小學校に於ける兒童の缺席狀況と結核性疾患に因り長期缺席せる者の數及死亡數……五八
(4)　家族内感染源の有無を察知せんとする二、三の試み……五九
(i)　同一家庭より通學する兒童に於けるッ反應陽性現出度(片寄小學校について)……六〇
(ii)　山王海特殊部落學童の調査を基礎にして感染源とッ反應陽性との關係を考察する……六一
(iii)　昭和一四年度に片寄小學校に入學せる兒童に就き入學當初檢査せるッ反應成績……六二
(5)　小學校教員結核問題に關する檢索……六四
九　片寄小學校兒童中ッ反應陽性、赤沈速度異常、レ線異常所見者の夏期休暇中に於ける養護成績……六七
一〇　教師に感染源無き場合のッ反應陽性率……七一
一一　總括……七三
第二節　山間に孤立せる山王海部落の感染狀態……七五
第三節　志和村の結核感染狀態……八六
一　檢査方法―受診率……八六
二　志和村ッ反應平均陽性率……八九
三　年齢別陽性率及び特に乳幼兒の陽性率……九二
四　性別觀察……一〇〇
五　ッ反應陽性者の戸別現出度……一〇六
六　生活程度別陽性率……一〇八
七　出稼經驗者の陽性率……一一〇
八　結核性疾患の既往症ありと告知せる者のッ反應成績……一一三
第三章　農村結核死亡統計……一一四
第一節　結核死亡率……一一四
第二節　結核死亡者の疫學的病歴……一二七
第四章　農村結核對策……一四五
第一節　志和村に於ける對策……一四五
第二節　熊谷教授の提唱せる對策……一五八
第五章　結び……一六八

第三篇　東北農村乳幼児衛生に關する覺え書……一七三
第一章　緒　言……一七三
第二章　醫學統計的分析……一七七
第一節　絶對生産數の年次的變動……一七七
第二節　父又は母の職業により分ちたる出生數……一八一
第三節　季節と出生數との關係……一八二
第四節　出　生　率……一八八
第五節　出生兒の性別比較……一九八
第六節　死　産　率……一九九
第七節　乳幼兒死亡率……二〇八
第三章　乳幼兒健康診査成績……二一三
第一節　檢査手段及び項目……二一三
第二節　性別比較……二一五
第三節　兩親の年齢……二一五
第四節　同　胞　數……二一七
第五節　榮養法及び母乳量……二一八
第六節　母乳荒川氏反應……二一九

第七節　乳幼兒體重……二二一
第八節　上　膊　圍……二二三
第九節　乳兒の中體重減少の著しきものに就て……二二五
第四章　結び—總括……二三八
附說　農村新産兒に關する私見……二四二
第一節　統計的事實……二四四
第二節　考　察……二五〇
第三節　本論文の要旨及び結論……二五四
第四篇　補　遺……二五六
第一章　山王海部落民の血液ヲ氏反應……二五七
第二章　志和村學童の血液型——人種係數……二五六
第三章　志和村學童の尿所見……二五九

目次終

東北一純農村の醫學的分析

岩手縣志和村に於ける社會衞生學的考察

第一篇　一視角より觀察せる志和村の經濟的概況

第一章　緒言

今日吾々がその中に住んで居る社會は資本主義的社會である。此の資本主義的社會に於ける農業＝農村は如何なる發展傾向をとつて來たか、また現にとりつゝあるか、と云ふ問題を此の村に於いて出來る丈け分析し、吾々の農村醫學的調査に生命を吹き込む試みが、本稿で取り上げられる筈である。

資本主義的社會に於ける農業＝農村の分析は、資本は農業をどう捉へるか、資本は農業に於ける生産形態、及び所有形態をどう變革するか、そして斯樣な過程はどの樣に進行し、又どの樣な結果を生ずるであらうか、と云ふ問題の分析に外ならない。それに對して諸學者は、農業への資本主義の侵入—農村人口の資本主義的分化と、中間的農民層の分解といふやうな基本的線を見ることには、大體一定して居る。然し、一見甚だ明瞭に見える此の基本的命題を種種樣々の特殊的事情の具體的分析の上に生かし、且つ立證しようとなると、忽ちそれは捉へどころの無い樣な難しい仕事に轉化する。それは、農村社會を舊い姿のまゝに、束縛し抑止して置かうとする樣々な所有形態、及び生産形態を、資本が、種々の形態に於て、種々の手段によつて自己に從屬せしめ、自己の姿に型どつて變型せしめる過程が、甚しく複雜で、簡單に見透し得ないからである。從つて此の難事を正しく解決するためには、資本が農業に侵入する諸形態に從つて、その研究方法を變へ、問題を種々に提起し、各種の問題に應じて分析方法を變へ、統計資料を正しく批判し、評價し、理解し、表現し得るやうにしなければならない。

東北地方に於ける一農村としての志和村、詳しく云へば岩手縣紫波郡志和村が、どの樣な經濟的條件の下にあるかを分析しようとする吾々の場合に於ても、仕事は著しく困難であつて、輕々と結論を下すことができず、概觀を得るに止つたのであるが、斯かる研究の際に陷り易い偏向、即ち小農經營に於ける苛酷なる勞働と、劣惡なる榮養とに眼を閉ぢて、小農民の勤勉と節約の美德を禮讃し、たゞその樣な立場を意識的、無意識的に理論にとり入れることや、統計資料上の數字を無批判的に呑みこむことや、農業に於ける資本主義の發達性を肯定し乍らも、その錯綜した多樣多面の現象形態を、正しく、綿密に分析することの困難なために、動もすれば、舊い封建制の桎梏下に於て、資本主義的分化の結果、新しく對立的に形成される階級分化を過大評價し、又之と反對に中世的—封建的遺制の根强い殘存と、その執拗な影響力とを忘却、乃至は抹殺して、資本の作用と、それとの關聯に於る一面からのみ事態を論證し、解決しようとする傾向、これら全ての偏向を避けるべく、注意を拂つて、できる丈け正しい概觀を得るに努めた。

第二章　志和村に於ける小經營存續の現狀

吾々の仕事は、順序として、封建社會に於ける志和村の狀況と、明治維新による社會變革の影響を分析し、其後に於ける資本主義社會に於て、農業＝農村の特質が漸次顯著となる時期を分析して、現狀を考察する、と云ふ方法が望ましいのだが、資料を蒐集することが困難であり、且つどの程度に古い資料を信頼してよいか疑問と考へるので、いまは逆に、現在の事實に關する統計資料を作成し、日本農業の特色との隔りを觀ることから出發することにする。斯くすることに依つて、ある先入見に捉はれることから可成り免れることができると考へたからである。

さて、日本農業の特色は、その極端なる零細經營に在る、と云はれて居るが、志和村の現況は如何であらうか。昭和十四年現在に於ける土地面積は、耕地總面積一一六七・八一二七町歩であり、農家總戸數七五八戸に對し、一戸當耕地面積は一・五四〇六町歩である。その中、田畑別耕地面積及び各々の一戸當面積、その他宅地、山林、原野の面積は表示の如くである。

第一表　土地總面積及一戸當面積

	總計	一戸當
田	七九四・二二二一町	〇・八八二一町
畑	三七三・五九〇六	〇・四一二一
宅地	八一・二二〇三	〇・〇九一八
山林	三八四一・九〇二四	四・二八二三
原野	一六〇・六九一五	〇・一七二八
其他	〇・二六〇三	〇・〇〇一〇

昭和六年度に於ける農事統計表に依れば、農家一戸當耕地面積は、全國平均に於て一・〇六町歩であつて、平均以上を示すものは北海道の四・五四町歩、東北の一・四二町歩、關東の一・〇八町歩及び北陸の一・〇七町歩である。其の他の農區は全て、遙かに平均以下である。これ等の數字を諸外國のそれと比較すれば、著明な差異が認められる。即ち、北米合衆國に於ては、一戸當耕地面積は約三二町歩であり、デンマークに於ては一六町歩、英本國に於ては九町歩、比較的一戸當耕地面積の少い獨逸に於てすら、四町三反である。以上より、日本の農業が如何に小規模であるか、そして志和村に於ても亦、その例外ではあり得ないことが觀られる。

第二表　農家一戸當耕地面積（昭和六年農事統計表）

全國	一・〇六町	北海道	四・五四町	東北	一・四二町		
關東	一・〇八	北陸	一・〇七	東山	〇・七六		
東海	〇・八三	近畿	〇・七三	中國	〇・七四		
四國	〇・六九	九州	〇・九三	沖縄	〇・六五		

更に志和村の耕地面積廣狹別戸數を觀察する。即ち所有耕地面積別戸數は、田に就て、昭和十四年度に於ては、五反未滿の田を所有するもの四一・二%、五反以上一町未滿のもの二三・六%、一町以上三町未滿のもの二七・六%、三町以上のもの七・七%にして、一〇町以上二〇町未滿の田を所有するもの二戸となつて居る。昭和四年度に就ても大體の傾向は同樣であるが、この年と比較して昭和十四年度は、五反未滿及び五反以上一町歩未滿の戸數が稍々減少し、一町以上三町未滿及び三町以上五町未滿の田所有戸數が稍々增加して居ることが注目される。同時に耕作耕地廣狹別戸數を見れば、昭和十四年度に於て、五反未滿の田を耕作する戸數一九・五%、五反以上一町未滿三五・六%、一町以上三町未滿のもの四三・五%であり、昭和四年度と比較して、一戸當耕作耕地面積は稍々增大の傾向をとつて居ることが見られる。畑に就て見るも同樣な關係が觀察される。即ち畑の一戸當耕作面積は著しく零細で、昭和四年度に於て、總戸數の七八・九%、昭和十四年度に於て、八六・四%は一町未滿を耕作し、而もこの中五反未滿耕作戸數が斷然多い。以上に於て、志和村の農業は、日本農業の特色より隔ること無く零細農經營である、ことの具體的內容を見ることが出來た。

耕地所有者戸數の割合を、全國、東北、岩手縣の夫れと比較するために第四表を附加する。

第三表　志和村所有耕地、耕作耕地廣狹別戸數

	所有耕地廣狹別戸數				耕作耕地廣狹別戸數			
	昭和四年		昭和十四年		昭和四年		昭和十四年	
		%		%		%		%
總數 田	八〇八	一〇〇・〇	五九八	一〇〇・〇	七八二	一〇〇・〇	七五八	一〇〇・〇
總數 畑	七四七	一〇〇・〇	五九七	一〇〇・〇	七一五	一〇〇・〇	七〇五	一〇〇・〇
五反未滿 田	三八二	四七・三	二四六	四一・二	一二七	一六・三	一四八	一九・五
五反未滿 畑	四五七	六一・一	三五七	五九・七	四七二	六〇・〇	四一五	五八・八
五反以上一町未滿 田	二三一	二八・六	一四一	二三・六	二六七	三四・二	二七〇	三五・六
五反以上一町未滿 畑	二〇三	二七・二	一二六	二一・一	一三五	一八・九	一九五	二七・六
一町以上三町未滿 田	一五一	一八・七	一六五	二七・六	三七二	四八・二	三三〇	四三・五
一町以上三町未滿 畑	八〇	一〇・七	一一三	一〇・九	一〇七	一五・〇	九五	一三・五
三町以上五町未滿 田	二六	三・二	三二	五・四	一五	二・二	一〇	一・三
三町以上五町未滿 畑	四	〇・五	一	〇・二	〇	〇・〇	〇	〇・〇
五町以上十町未滿 田	一六	二・〇	一二	二・〇	一	〇・一	〇	〇・〇
五町以上十町未滿 畑	三	〇・四	〇	〇・〇	〇	〇・〇	〇	〇・〇
十町以上二十町未滿 田	二	〇・三	二	〇・三	〇	〇・〇	〇	〇・〇
十町以上二十町未滿 畑	〇	〇・〇	〇	〇・〇	〇	〇・〇	〇	〇・〇

第四表　耕地所有者戸數の割合（昭和十一年農林統計）

	五反未滿	五反以上一町未滿	一町以上三町未滿	三町以上五町未滿	五町以上十町未滿	十町以上	十五町以上
岩手	四〇・一	二五・八	二五・四	五・九	二・二	〇・六	〇・〇四

東北	四三・九	二三・九	二二・七	八・二	二・四	〇・九	〇・一〇
全國	四九・六	二五・四	一七・七	四・五	二・二	〇・九	〇・〇六

日本に於ける零細農民經濟形態に就ては、封建時代に於ける農業發達の樣相、及び近代的土地所有制成立の過程が非常に重要な意味を有つに相違ないが、此等の點につき經濟學者は種々の說を樹立してゐる。そして吾々は經濟學者に伍してそれらの諸要因を分析することは中止して、一般的に信じられてゐることに從ふべきであらう。零細農耕の「集約化」が、日本農業の一つの特徵であるが、これは外ならぬ「双手勞働」に基くことを示して居る。零細農民經濟の家族的勞働力の、半隷農的勞働方法に於る長時間の、肉體消耗的な全支出が「集約化」或は「多角化」の主要基礎であり、勞働諸條件の改良の可能性を遮斷して來た。そして農業に於ける資本主義の發達による技術水準の發達（遲遲たる機械化、電化、化學化、しかも牛馬耕化の發展すらもとるに足らない）は全體として問題にならない程度である。かくて此の封建的農耕技術水準、而もその停滯に表示せられた、生產諸力の發展に於ける麻痺的遲滯は、零細農民經營に於ける半隷農的基本勞働力の貧困化の、低位の生計水準に特徵的に表れる。零細農經營の狀態に關して、明治四十二年頃からの全國統計資料を見るに、五反未滿の農家は不斷に減少し、五反以上一町未滿耕作農家戶數は增加してゐるが、その增加傾向は比較的緩慢で、一町以上二町未滿の戶數の增加の方が目立つてゐる。二町以上三町未滿の耕作農家は大正九年までは增加してゐるが、その後は減少してゐる。三町以上の農家は二階級共に著しい勢で減少して居り、只大正三年より八年に至る五箇年の減少數は、他の年に比較して非常に低い。これらは次の表に示される。

第五表　全國農家戶數增減表（東浦＝日本農業概論　二九頁）

	五反未滿	五反以上一町未滿	一町以上二町未滿	二町以上三町未滿	三町以上五町未滿	五町以上
自明治二十四年至大正三年平均	一 五・六五	+ 七・〇三	+ 六・六七	+ 一・七三	一 一・七四	一 二・二四
自大正三年至〃八年平均	一 二・七二	+ 一・〇六七	+ 一〇・〇八	+ 二・五九〇	一 ・二二	一 ・二九二
自〃八年至〃十三年平均	一 八・四五八	+ 五・一四五	+ 七・七九三	一 三・五九四	一 二・五八〇	一 一・八一
自〃十三年至昭和四年	一 三・三五九	+ 六・〇七二	+ 七・三八二	一 一・五七一	一 二・三五四	一 一・二四八

即ち、大土地所有の分解による所有規模の落層現象と、五反以上二町未滿耕地經營農家戶數グループへ向けての耕作耕地廣狹別戶數の落層傾向が注目され、志和村の實情も、これらの傾向、特色を示してゐることは前述に見る通りである。以上に於て、志和村に於ける零細農家經營の現狀及びその發展過程を、日本全體に見る線と比較し、志和村農家經營が全國農村の平均狀態を示すと看做して間違ひのない所以を指摘した。

第三章　志和村に於ける農業經營及び農家經濟

昭和十四年に調査せる志和村職業別戶數は次の通りである。即ち農業戶數は全體の八四・七%を占め、商業戶數の七・三%、工業戶數の三・一%と比較して壓倒的多數である。農業戶數七五八戶の中六五一戶は副業を所有してゐる。

第六表　職業別戶數（昭和十四年）

	本業戸數	總戸數ニ對スル本業者ノ百分率	農業ヲ本業トスルモノノ副業戸數	工業ヲ本業トスルモノノ副業戸數	商業ヲ本業トスルモノノ副業戸數	賃勞働ヲ本業トスルモノノ副業戸數
農業	七五八	八四・七	六五一	—	—	—
工業	二八	三・一	—	二二	—	—
商業	六五	七・三	—	—	四二	—
賃勞働	三〇	三・四	—	—	—	二一
其他	一〇	一・一	—	—	—	—
無職	四	〇・四	—	—	—	—
計	八九五	一〇〇・〇	六五一	二二	四二	二一

又一戸當人口は、昭和四年度に於て六・三七人、昭和十四年度に於ては六・一五人である。これらの數字は比較的家族員の少い他職業戸數をも含めての平均であることを考慮に入れゝば、志和村農家の扶養する家族人員はより多いと見なければならない。この數字は全國農家平均の七人强と比較すれば、幾らか少いが、それでも日本の一世帶人員に比較するときは非常に多い。農業の如き傳統的職業に於ては、比較的家族人員が多く（農業に於ては新たな世帶の形成が極めて少い）、又經營の大きくなるに從つて家族人員は增加する傾向にあるが、この家族人員の多數は、農業に於ける勞働集約度の深さと農家の生活の困難を示す。

第七表　戸口增減の狀況（昭和十四年調）

	昭和四年	昭和十四年	增減
戸數	八六三戸	八九五	十三二
人口	五五〇一人	五五〇六	十五
男	二八一一	二七六〇	一五一
女	二六九〇	二七四六	十五六
一戸當人口	六・三七	六・一五	十〇・二二

又自小作別戸數を見るに、表に示す如く、最近に於ける地主兼自作の減少傾向と、純小作農の漸增傾向が觀取される。農業戸數は昭和四年と昭和十四年と比較して、全體として七八三戸より七五八戸に二五戸丈け減少して居る。志和村に於て特徴的なのは、自作兼貸小作、自作、自作兼小作戸數が全體の七二・六%で壓倒的多數を占め、小作戸數が全國平均に比して著しく少い點である。地主兼自作四七戸も、內容を吟味すれば大地主は皆無であつて、かゝる事情は小作戸數の少い事情と相關聯してゐる。例へば、昭和六年度の全國農家總戸數に對する自作戸數の割合三一・二%、自小作の四二・三%、小作の二六・五%と比較せよ。

第八表　自小作別戸數及耕地面積

	昭和四年 戸數	昭和四年 總戸數ニ對スル歩合	昭和十四年 戸數	昭和十四年 總戸數ニ對スル歩合	昭和十四年耕作面積 田	昭和十四年耕作面積 畑	昭和十四年耕作面積 計
地主兼自作	五九	七・五	四七	六・二	一〇二・〇九町	四〇・〇八町	一四二・一七町
自作兼貸小作	一五〇	一九・二	一二五	一六・二	一五四・五〇	七五・五一	二三〇・〇一
自作	一五七	二〇・〇	一八〇	二三・四	一〇三・二七	六七・八三	一七一・一〇
自作兼小作	二八二	三六・〇	二五八	三四・〇	二四一・一七	一三一・〇四	三九四・二一
小作	二三五	一七・三	一六〇	二一・二	二五六・八九	八一・九九	三〇七・八八

計	七三	100・0	七八	100・0	七五七・九二

※　地主兼自作トハ自作ニシテ田一町歩以上ノ貸付ヲナスモノ

※　自作兼貸小作トハ自作ニシテ耕地一町歩以下ノ貸付ヲナスモノ

次に志和村農家一戸平均所有資産、及びその自小作、純小作別所有資産を觀ると、土地財産が極めて主要な地位を占めることが注目される。土地其物は農業經營の基礎條件であるけれども、これのために農業が多額の資本を喰はれ經營上不利益であり、土地問題が日本農業諸問題の基礎をなす事情が說明される。家族人員が全國農家平均よりも少く、それは牛馬所有數が全國平均よりも多いことによつて補はれる。又負債が一戸當五八六圓であり貯金が之に反して二三、五八圓である事實も農家經濟の困難なることを示してゐる。

第九表　志和村農業經營の基礎（昭和十一年調）

	村農家一戸平均所有資産	自小作田八反歩以上一町歩所有者十戸平均	純小作耕地面積八反歩以上一町歩十戸ニツキ
田	九・三・二〇（町反畝歩）	九・三・二〇	〇
畑	五・五・一五	八・〇・一二	一・一九（畝）
山林	一・〇・七・一八	五・一・二〇	・一五
原野	一・四・一二	五・〇〇	四・〇〇
宅地	一・〇・一五	一・一・〇四	三・二三
田小作	一・三・〇九	七・一〇	九・五・〇〇（反）
畑小作	三・二四	・〇〇	三・五・二二
牛馬	一・五（頭）	二・〇	一・〇
負債	五八六・〇〇（円）	五三五・〇〇	二九七・二五（円）
貯金	二三・五八	一四・〇〇	八・七五
家族	六・三（人）	七	—

志和村に於ける農林業生産を見るに、總生産額及び一戸當生産額は大正二年より昭和四年迄の間に三二六圓より一四一一圓の間を動搖し、年次による斯くの如き生産額の著しい差異は農家經濟の不安定性の一面を示す。

第十表　志和村總生産額及一戸當平均生産額（大正二年――昭和四年）

	總生産額	累年指數	一戸平均生産額	指數
大正二年	二四一、〇五九（円）	一〇〇	三二六（円）	一〇〇
〃　三年	二五八、八五一	一一二	三五〇	一〇七
〃　四年	二四〇、九七〇	一〇〇	三二二	九九
〃　五年	三〇七、八五九	一二八	四〇四	一二四
〃　六年	五二八、一五一	二一九	六六四	二〇四
〃　七年	八六五、四七一	三五九	一、〇八〇	三三二
〃　八年	一、一三八、五七五	四七三	一、四一一	四三二
〃　九年	七一三、八九五	二九六	八八六	二七二
〃　十年	八五五、九六七	三五五	一、〇五三	三二四
〃　十一年	—	—	—	—
〃　十二年	—	—	—	—

〃 十三年	七八一、五七四	二二四	九三九
〃 十四年	八九〇、四九〇	三六九	一、〇六〇
〃 十五年	六二九、二三〇	二六一	七四六
昭和二年	七〇二、二二八	二九〇	八三二
〃 三年	七〇二、三二八	二九〇	八三二
〃 四年	八四一、七三七	三四八	—

※ 大正十一、十二年ノ米價奔騰ニ貯蓄米ノ大部分ヲ賣却シ次イデ七ヶ年ノ旱害ノタメ大正十四、五年頃ヨリ莫大ナ借財ヲスル樣ニナツタ昭和四年ノ借財ハ村約八十萬圓一戸平均約九百圓

又凶作といふ自然的環境の影響による農産額の變動も重視すべきであつて、試みに昭和七年、八年、九年の三箇年を比較すれば、農産額の動搖は著しく、昭和七年及び九年は凶作である。

第十一表　志和村總生産額

	昭和七年	昭和八年	昭和九年
農産	二五一、七九四円	四三八、一一六円	二〇七、四一三円
畜産	一〇、三八三	一四、七四四	一四、四〇四
林産	三五、三五七	四八、一〇四	六九、六五三
工産	六五、八〇九	七二、五一七	六八、〇四二

志和村に於ける農林業生産の更に詳細な內容は、昭和十三年度に於て第十二表の示す如くである。

第十二表　志和村に於ける農林業生産（昭和十三年度）

	戸數	反別又ハ規模 總額	反別又ハ規模 一戸當	産額 數量	産額 金額	産額 一戸當數量	産額 同上金額
耕種 米	七五八戸	七五七九反	一〇〇畝	一六二八九石	五三八七一五円	二一五斗	七〇九円
大麥	五三一	八二三	—	一五一五	二二七二五	二八	四二
小麥	六一一	一〇七八	一八	八九九	一八八八九	一五	三二
燕麥	一五六	二三〇	一五	三六八	四四一六	二四	二八
大豆	六六九	一一三二	一七	七九二	一四二五六	一二	二一
小豆	五六三	一二五	—	七一	一四二〇	—	三
粟	六五	六八	—	九五	九五〇	—	一五
稗	三六	二一二	—	二四九	二四九三	—	六九
蔬菜	—	—	—	—	一七六四八	—	—
果樹	—	—	—	—	二六五〇	—	—
大麻	二一〇	一四	—	三六〇	一四四〇	—	—
亭麻	四五	四	—	八〇	二四〇	—	五
小計	—	—	—	—	六二五八四二	—	—
養蠶	—	—	—	—	五八三八	—	—
馬	五八四	九五八頭	一・六	—	四八六六四	—	八三円
牛	二〇	三一	一・五	一九	三五四九	—	一七七
豚	四六	六七	一・四	七一	一〇〇七	—	二二

畜産	緬羊	一・三	三・一	二・四	二	三〇	—	二
	鶏	三五・四	一九・九	五・五	七〇・四	七六・一	—	二
	鶏卵	三五・四	—	—	—	一三四・四	—	三
	家兎	五五・四	一三・一五	二・四	一二六・八	一五六・四	三	三
	山羊	四・一	四・六	一・一	—	—	—	八〇
	牛乳	—	—	—	—	二六四・四	—	—
	小計	—	—	—	—	五九五六・三	—	—
農産加工		—	—	—	—	六三三・六	—	—
林産加工		—	—	—	—	一六三八・三	—	—
山林		—	—	—	—	三八九九・六	—	—
自給肥料		—	—	—	—	六九二一・九	—	—

以上示したところに依り、農民が零細なる土地面積の上に、できる丈けの生産を擧げることに必死になつてゐる狀況が汲み取られる。農民の極端な勞働集約化に依つてのみ、農業に於ける高き地代や、多額の負債利子や、租稅負擔や而して肥料その他の商品購入は可能ならしめられてゐる。狹小なる面積より多額の所得を得るに非ざれば生計の困難なるにより、反當勞働投下量の激增となり、單位勞働報酬の激減となつてゐることが指摘されて居るが、農民のかかる過勞は、この村に於て如何なる形をとるであらうか。次の二つの表はそれに對する若干の說明を與へるものと思はれる。即ち志和村農林家の所在勞力は第十三表の如くで、昭和十四年四月現在に於て二三〇一人である。

第十三表　農（林）業家の所在勞力（昭和十四年四月調）

年齡	現住人口（公簿ニヨル）男(a)	女(b)	農林家ノ現住人口左ノ女ヲ男ニ換算d×〇・八 男(c)	女(d)	(e)	c＋e (f)	農林家ノ所在勞力 男一人前ニ換算スルタメノ指數
一四歲以下	一〇二八	九三七	一〇〇九	九一八	七三四	一八三五	〇
一五—二〇歲	三三四	三一八	二九八	二九八	二三八	五三六	三二二
二一—二五歲	九八〇	一〇〇四	七八五	九四二	七五四	一五四七	一・〇
二六—六〇歲	二一七	二二五	二〇三	二一八	一七四	三七七	三〇二
六一—七〇歲	一三九	一八〇	一三二	一五九	一二六	二五九	一三〇
七一歲以上	六二	八二	五七	八一	六五	一二二	〇
計	二七六〇	二七四六	二四八四	二六一六	二〇九三	四六七六	二三〇一

第十四表　月別勞力の分布及過不足狀況（昭和十四年四月調）

	村內所要勞力 農業所要勞力 家事其他勞力	計(A)	村外ヨリノ雇入勞力(B)	A—B 差引農家ノ村內ニ利用セル勞力	村外ヘ農家ニ利用セル勞力(C)（上二欄計）	農林家ノ所在勞力(D)	D—C 勞力ノ過不足
一月	三三五・八一	三三五・九四	五五・一七五	三三五・三	五四・八三	七二三・三一	五九・三三
二月	二〇九・六三	二五七・七二	四六・七三五	二二〇	四六四・一五	九〇五・五	—
三月	四四〇〇・七	一八九五・〇	五二九五・七	三三五・三	五三六〇・四	一〇五七・七	—
四月	四六〇・二	一三六四・四	五九六六・五	三四・三	五九三三・三	六一三九・九	—
五月	五八五六・七	九八五・四	六八四・二	五〇五・	六七九一・六	三五五・五	—
六月	七一四〇・三	七五八〇	七九二八・三	六五六・	七八六三・七	三八四七・七	八三四七・四

七月	六一七六	一三二六	七三九〇四	五〇五	七三三九	二五五六	七二三二	七二三二	一	四六四二
八月	三三八八	二〇四六六	四四二八四	三三三	四三九三一	三一〇〇	四〇〇三一	七二三二	二三三〇〇	一
九月	三三八二	一五一六〇	五一〇四二	三四二	五〇七〇〇	一〇三六	五一〇三六	六九〇三〇	一六一九四	一
十月	六一二三七	九八五四	七一〇九一	六四六	七〇四四五	二一四八七	八一九三二	七一三二一	一	一〇六〇一
十一月	六五〇三〇	九八五四	七四八八四	三四二	七四五四二	一〇一三六	八四七七八	六九〇三〇	一	一五七四八
十二月	二六〇三二	三三六二六	六一六五八	三三三	六一三〇五	一〇三七七	七一八二一	七一三二一	三五一	一
計	三二六一七	二一四八二	七三九〇九九	三五〇九〇	七三四〇二九	七七六三九	八一二六八	八三九八六五	七五七一六	四四四一七

月別勞働の過不足狀況を調査すれば、五月、六月及び十月、十一月に於て著しい勞力不足があり、この季節に於て過勞が激化される。「過勞」は社會衛生學上の重要課題であることに留意して、これらの數字は吾々の今後續ける仕事に於て大いに役立つものである。第十四表に於て農業所要勞力は、田、畑、養蠶、林業其の他の各々に就き調査せるものの集計であり、田に要する勞力は、田總耕作面積七五七町九反二畝に反當勞力を乘じたるもの、畑に要する勞力は畑作付反別三八四町四反五畝に同樣反當勞力を乘じたるもの、又家畜に要する勞力は牛、馬、成豚、綿羊、山羊合計一一三三頭の一頭に付き一日〇・二人の割、家事その他に要する勞力は農家の全員五一〇〇人に對し一日十人に一人の割、卽ち二三〇人をその月の日數に乘じたるものゝ外に、焚火、稻架材料等伐採運搬に要する勞力二三二五〇人を農閑期に配分してある。過勞の季節別現出度はこれ等の表に依つて推定されるが「過勞」のみに依つて農家の生計を維持することは不可能である。そして此處に兼副業及び出稼等の問題が發生して來る。卽ち、資本の農村侵入の影響の下に極めて緩慢にではあるが、自然經濟が解體しつゝ商品經濟へ轉形して來る過程は、その主要な一面として先づ、貧窮化してゆく零細經營に於ては、從來自家用としてゐる良質米を販賣して、その代りとして廉價の米を購入するか又は麥雜穀類の雜炊を主食とするかの傾向をとるのみでなく、同時に、その麥雜穀類の畑そのものを、收益性のより高い米田へ轉換し、且つ借地開墾等を通じて、その米作反別の擴大のために努力する。また他の面にあつては資本主義の發展による經濟諸事情の影響の下に作物の轉換、または純商業的多角的經營への轉形といふ、純副業的な、半ば副業的色彩のある、或ひは純商業的な、商品生產への道をとる。かゝる事情を此の村に於て分析することは重要だが、今はその點に觸れることを避け、たゞ、農家戶數の大部分八六%が副業或ひは兼業をもつてゐる前記の事實を指摘するに止めよう。零細耕作經濟の大部分に於ては、その零細耕作からの收益によつては當然家計を維持してゆくことが出來ず、またその零細耕作面積は農繁期以外に於てその全自家勞力の一部しか消費し盡し得ない狀態であるから、その多くの部分の勞働力は、日雇、季節雇、または出稼などの種々の形態に於て賃銀に轉化される。以下に於て志和村の出稼狀況を觀察しよう。

第十五表　志和村に於ける雇はれ勞力（昭和十四年四月調）

		他町村ニテ農村内ニテ農以外ノ仕事ニ雇ハレタル勞力人	俸給ヲ受ケテ勞働セルモノ人	計	換算	女ヲ男ニ女ノ數×0.8	合計總數×365	年出稼男勞銀
年出稼	男	五三	四二	一〇三人		—	四三七二七	二七四五八円
	女	一四	五	二一	一六・八			三一三五
期節出稼	男	延五〇五六四		五四二七六			五四二七六	四三三九五
	女	—	—	—		—		—
臨時雇ハレ	男	延三〇九七		一〇一九九			一〇九九一・八	一〇一八八
	女	六八一		九九一	七九二・八			八九九
計		—	—	—	—	—	—	八五〇七五

※　季節出稼中他町村ニ雇ハルルモノハ主トシテ十月十一月十二月一月二月三月ノ約半年醸造業ニ從事ス

昭和十四年四月の調査に依れば、年出稼の雇はれ勞力は四三七二七人で、その勞賃は三〇五九三圓、季節出稼に於ては五四二七六人、その勞銀は四三三九六圓、又臨時雇はれは一〇九九一・八人で、その勞銀は一一〇八七圓となつて居る。即ち一戸平均一一二圓の勞銀を得ることゝなり、これらは農家生計を維持する主要な財源となつて居る。逆に云へば、これ丈けの勞賃を得ねば上記の如き低劣な生計すらも營み得ない農家の狀況を現はし、これは亦、農民の賃勞働者化―資本主義社會に於ける農業＝農民の特質―を示す以外の何ものでもない。

出稼勞働者中、季節出稼者は主として十月より翌年三月迄の約六箇月間酒釀造業に從事する。これは志和村農家經濟の特徴であり、この點について稍々詳細な分析が必要となつて來る。昭和十四年十二月現在に於る志和村出稼者數出稼先職業別、及び出稼期間を調査して次表を作成した。

第十六表　志和村出稼者數出稼先職業別及び出稼期間（昭和十四年十二月調）

	實數	%	出稼期間 一ケ月以上三ケ月	四ケ月及五ケ月	六ケ月及七ケ月	八ケ月以上十ケ月	十一ケ月及十二ケ月	一ケ年以上
總數	五九一	一〇〇・一	七三	二二八	六六	三七	一四	一四
一　酒造出稼者	四三二	七三・二		三	二			二七
二　工場勞働者※	三二	五・四					一	
三　鑛山勞働者	七	一・二				二	一	
四　通信運輸交通勞働者	一一	一・九					四	
五　大工、左官、土工等	一五	二・五			三		一	一〇
六　店員及徒弟	一六	二・七						
七　雜役夫及屠屋等	四	〇・七						
八　軍工其他	二六	四・四						二六
九　小學校教員	三	〇・五						
一〇　漁業勞働者	三	〇・二						
一一　看護婦	五	〇・九						
一二　女中子守等	二六	四・四						
一三　紡績女工	一〇	二・〇						
一四　其他	一	〇・二						

※　酒造工場勞働者ヲ含マズ

※※　出稼者トハ「一ケ月以上ノ契約日數ニ依リテ行ケルモノ」ニシテ且ツ「一定ノ期間後必ラズ歸リ來ルモノ」ヲ意味シ「近ク將來ニ再ビ歸リ來ラザルコトヲ豫想シ得ル離村者」ト區別サレタモノ

出稼者總數五九一名の中酒造出稼者は四三二名で、七三・二%を占め、酒造勞働者を含まぬ工場勞働者の五・四%及び軍工その他の四・四%、女中子守等の四・四%が之に次ぎ、鑛山勞働者や紡績女工の著しく少數なることが氣付かれる。出稼期間に就て云へば、酒造出稼者に於て、四箇月及び五箇月のもの二二八名、一箇月以上三箇月のもの七三名、及び六箇月以上七箇月のもの六六名が多く、又一箇年以上の出稼勞働者（季節出稼者に非ず）の數は一二六名に及んでゐる。此の中工場勞働者の二七名及び軍工、女中、子守、大工、左官、店員及び交通通信運輸勞働者が僅かながら存在することは注目すべきであつて、此の傾向は將來增大するものと考へてよからう。此の表から云へば近來に於ける軍需工業の躍進との關係は甚しく稀薄である。尚ほこゝで一言附加するが、吾々の調査に於て、出稼者と